

「営みの在処(ありか)3」について

Art Gallery 絵の具箱

生きることの根底を問い直す機会。道なき深い樹海に迷走し、加速し自走する増殖システムを俯瞰するように、生きることを見る。世界の時間と歴史、生活と想像のプリコラージュ。

未だ収束しない新型コロナウイルス感染の行方や、詭弁を弄するばかりの福島原発放射能汚染対策と脱原発への不十分な対応、人々の意識の忘却に期待する歪曲した政治の無為無策と利権構造による更なる汚染、収束を図る科学的方途や文化的人道的知見、医療体制の抜本的見直しや知恵を大局的観点から実践することに躊躇し、メディアやSNSの虚実不明の意識操作が横行する社会状況、それらに僕の思考・感覚や心身機能は、強く屈折した反応を示します。やはり世界は創られた仮想現実、あるいは人間の欲望と意識が錯綜複層化したイメージの深い森や海で、地球上の全ての生命体に害を及ぼしながら、個々や自他の関係性の物語や事象と行動の集合体(共同幻想)なのかと思ってしまう。

現在の僕は生活と創作との境界が曖昧化し、漠然とした主題(物語)性はあるものの、生きてきた時間や現実や諦観、身体機能を通しての思考や想像や幻想がゆったりと混合して一体化して来たような気がします。自然や社会の中で浮遊する塵のような我儘な一個の生命体。

そのような自分の生き様は、今もなお欲望のうねりと機能低下に翻弄されながらも、概ね「淡々と生きる営みの継続と変化と僅かな創意」と形容できます。最近はその「営み」の行動原理や核となるような表現欲求の理由を、塵のように浮遊しながらも、制作確認したいと思うようになりました。それは僕の生きる「営みの在処」を探る試みとも言えます。

僕は2001年以降、海岸で拾い集めた流木を素材に、タマゴの形を生かした作品を制作してきましたが、最近は金属や廃材を素材に加え、言語を用いた作品、等、自分の行為や経験との関わりの中で変化して行く物体の在り様に興味関心が移ってきました。また、生きている時間の物事や事象を、記憶を辿るように視覚化した作品を創る様にもなりました。

厳しい自然環境の中で成長した樹木だった流木や、使用された時間と状況を垢のように纏った古道具類が、僕によって彫刻、剥離、研磨、鍛金、接合、組み合わせられ再生して行きます。制作する中で見えてくる形、呼吸のリズムから生まれる形。そこに在った物事の何かを共有しながら、私の営みによって変容し、世界に存在しなかった事物が現れる不思議。

コロナ禍が続く日々、僕は今まで見たことのないモノ・見たかったモノの世界への期待と出現と、生きて存在する意味を探りつつ実感し、生存の充実した豊かさを世界と共有できる可能性に未だ期待しています。そのような僕の「営みの在処」が垣間見られるような作品空間の中で鑑賞する皆さんが、自らの生きた時間と記憶を自由に想起して、しばし今ここに存在することを楽しんでもらえたら幸いです。

2021年6月

勝 田 徳 朗